

本編⑮「第一大『犍度』」その4「中道から四聖諦」2020.10.10

○苦集聖諦 dukkha-samudaya-ariyasacca

苦集とは、再生をもたらす ponobhavika 喜び貪りと共に行き nandi-rāga-sahagata、随所に歓喜する tatrata- abhinandini 渴愛 taṇhā、すなわち欲 kāma 愛 taṇhā、有愛、非有 vibhava 愛。

→苦の集 samudaya が「苦が結果として生じるその原因」ならば、怒り dosa も無知 moha もなく貪 rāga に近い渴愛 taṇhā だけなのはなぜ？

苦聖諦は、生存・存在のすべてが一生涯から一刹那まで全部苦だった。

→楽も感じるのに。

楽を感じている間は、楽の正体が苦だとは分からない。

「本当は苦なのにそれを 楽と感じ誤解する原因は渴愛」ということ？

そもそも「苦の集 [sam 一緒に udaya 湧き起こる] (udaya-bbaya 生・滅)」は苦の原因 hetu ではない。

→苦集（苦と共に湧き起こるもの）は渴愛なので、苦だと分からず楽とさえ感じ誤解し、忌み嫌うよりむしろ乞い求めるから、苦の生存・存在が続くという意味？

※三毒（貪 rāga[lobha]瞋 dosa 痴 moha）で瞋 dosa と対比される貪 rāga と

十二因縁にも出る渴愛 taṇhā の違いは何？

◎無明→行→識→名色→六処→触→受→愛（渴愛）→取（五取蘊）→有→生→老死

「[苦・楽・不苦不楽の] 受によって愛」なので渴愛は貪 rāga 瞋 dosa 痴 moha 全部を含む？

Taṇhā: drought, thirst, craving, hunger, excitement, fever of **unsatisfied** longing

「渴き」は貪りだけでなく **不満→怒り dosa** を含む。その根底には無知 moha がある？

◎貪 rāga は colour, hue, dye; excitement, passion, lust

（貪 lobha は covetousness, greed. lobha-dosa-moha も rāga-dosa-moha もある）

◎瞋 dosa (Skt. Doṣa) は inferior, blemish, fault, defect, bad condition;

(Skt. Dveṣa) は anger, ill-will, wickedness, malice, corruption, hatred

◎痴 moha は stupidity, delusion, bewilderment 困惑。頭の混乱状態。

→無明 avijjā は根本的な無知「愚か者 mogha[moha]-puriso × avijjā-puriso」

○苦滅聖諦 dukkha-nirodha-ariyasacca

苦滅とは、渴愛 taṇhā の asesā-virāga-nirodho 残りなき離（色がなくなった）・滅 cāgo 捨棄 paṭinissaggo 遮棄 mutti 解脱 anālayo 覆蔵もないこと。

→苦の集（原因？）＝渴愛が完全に滅すると、苦が滅する。＝解脱する。

「人生は苦だ。嫌だ」と思うところからの修行→解脱ではなさそう。

「(渴愛で) 楽を感じるのに、結局はうまくいかず悩み苦しみに帰結する。どうすればいい？」と調べると、「渴愛が問題だ。これを滅すれば苦が滅する」と気付く。

※渴愛 *taṇhā* は十二因縁（生存の存続・輪廻のカラクリを説明）で最も断ち易い項目。

スマナサーラ長老「断つべきは無明か渴愛。無明をいきなり断つのは超難しい」

### ○苦滅道聖諦 *dukkha-nirodha-gāminī paṭipadā ariyasacca*

苦滅道とは八聖道 *ariyo aṭṭhaṅgiko maggo*（戒定慧の三学にまとめることができる）

正見、正思 → 「慧」（見解を破る）

正語、正業、正命 → 「戒」

正精進、正念、正定 → 「定」（修行の行と言うべきだが最後の定で表す：註釈）

### ○三転十二行相で四聖諦を復習

「苦聖諦はこれ *idam*」という智 *ñāṇa* 慧 *paññā* 明 *vijjā* 光明 *āloko* が生じ、

「苦聖諦を遍知すべし *pariññeyyam*」という、、、

「苦聖諦を遍知せり *pariññātam*」という、、、 光明が生じた。→悟った。

→四苦八苦のすべてが苦だと知り尽くして悟り。預流果？

×一切皆苦。○一切行（＝四苦八苦）苦。

「苦集聖諦はこれ *idam*」 「断ずべし *pahātabbam*」断じたり *pahīnam*」と、

→苦の因である渴愛を断って悟り。阿羅漢

「苦滅聖諦はこれ *idam*」 「現証すべし *sacchikātabbam*」 「現証せり *sacchikatam*」、

→苦の滅を達成して悟り。阿羅漢

「苦滅道聖諦はこれ *idam*」 「修習すべし *bhāvetabbam*」 「修習せり *bhāvitam*」、

→苦を滅する修道を修習し終えて悟り。阿羅漢

「比丘たちよ、四聖諦を『三転 *ti-parivaṭṭam* 十二行相 *dvādasa-ākāram* で』如実智見し *yathā-bhūtam ñāṇa-dassanam*、悉皆清浄になった *suvisuddham ahoṣi* ので、無上正等覺を現等覺した *abhisambuddho* と知らしめたのだ *paccaññāsim*。」

*Paṭi-aññāsim* → “*aññāsi vata bho Koṇḍañño*” → *aññātaKoṇḍañño*